

2022年1月31日

2021年度聖路加国際大学大学院看護学研究科

修士論文

学生の言語化困難に対する看護教員の認識と
看護教員の指導方策の関連探索研究

An Exploratory Study of the Relationship
between Nursing Teachers' Perceptions of Students' Difficulties
in Verbalization and their Recognition of Teaching Methods.

20MN012

久保田 貴博

要旨

「目的」：臨地実習における、＜学生の言語化困難に対する看護教員の認識＞とそれに対する＜臨床指導者との連携方策＞および＜看護教員の指導方策＞の3概念を記述し、関連を探索することで、学生の言語化を促進する教員の関わりを検討した。

「方法」：全国の看護師学校養成所に勤務する各論6領域の看護教員を対象にwebを用いて、無記名自己記入式質問紙調査を実施した。質問紙は文献検討により作成し、3概念を問う4件法のリッカート尺度と、質問紙に記載のない学生の言語化困難への認識・指導方策を問う自由記載で構成した。分析は、3概念の因子構造の確認に探索的因子分析を行なった。さらに、クロンバック α を算出し内的一貫性を確認した。教員特性ごとにMann-WhitneyのU検定、またはKruskal-Wallis検定を行った。また、3尺度間の相関はSpearmanの順位相関係数で確認した。分析にはSPSS statistics26を使用した。自由記載項目は、Berelson.Bの内容分析の手法を参考に質的帰納的に分析した。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号21-A015)。

「結果」：質問紙の有効回答率22.0%(250名)であった。量的データ解析の結果、＜学生の言語化困難に対する教員の認識＞は3因子19項目で構成され、全項目のクロンバック $\alpha=0.79$ であった。この3因子は、『知識に基づき考える力の不足』(3.31)、『対象の状態を観察しとらえる力の不足』(2.68)、『対人関係・環境が与える緊張や疲労から実習に専念できていない』(2.57)の順に平均値は高かった。＜臨床指導者との連携＞および＜看護教員の指導方策＞を行っている認識が高いのは、教員経験年数が長く、教育系受講歴あり、4年制大学の教員であった。また＜学生の言語化困難に対する看護教員の認識＞と＜看護教員の指導方策＞の間には有意な相関はみられなかった($r=0.076, p=0.233$)。質的データ分析では自由記載項目の分析では未抽出の項目として、言語化を困難とする学生の認識、教員の指導それぞれ5テーマ、14カテゴリーと5テーマ、9カテゴリーが抽出された。

「結論」：教員は言語化促進のために、『知識に基づき考える力の不足』には、学生が言語化しやすい話題から言語化に誘導し、学生の言葉を教員が言語化することで見本をみせる関わりを行うことができる。『対象の状態を観察し捉える力の不足』に対しては、教員がロールモデルとなり、言語化の題材となる患者との関わりを支援することができる。その後の振り返りで学生の言動をよく観察し、学生理解のもとで言語化から気づきを促す支援を行うことができる。『対人関係・環境が与える緊張や疲労から実習に専念できていない』に対しては、臨床指導者との連携のもと、教育学的雰囲気づくりを行うことができる。